

教職課程科目「教育学原論」のオンライン授業化

— 学生との意見交流を通じた授業づくりと改善 —

小林 昇光

岡山理科大学教育推進機構教職支援センター

1. 本稿の目的

本稿の目的は、教職課程科目「教育の基礎的理解に関する科目:教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に位置づけられる「教育学原論(2020年度春1学期 担当:小林昇光)」(以降、当科目)において、筆者によるオンライン授業実践について省察していくことである。特に、受講学生を対象としたアンケート調査データ、毎回配付・回収を実施しているコメントカード等を用いた学生との意見交流を通じた授業づくり、改善の様相を記述していく。

2020年8月現在、世界各地にCOVID-19の感染が広まっている。わが国も同様で、2020年2月27日に安倍晋三首相による緊急記者会見が開かれ、全国の小学校・中学校・高等学校に3月2日から春休みまで、一斉休校の要請が出された。

その後、全国各地の学校、大学が次々と4月からの授業開始日を延期させる対応が取られていった。筆者が所属する岡山理科大学(以降、本学)においても、2020年度春1学期の授業開始日が当初の予定よりも後ろ倒しとなり、4月20日の授業開始となった。そして、本学においても他大学同様、オンラインによる講義を実施する方向となり、本学のオンライン授業では、学内LMSであるMylog、ウェブ会議システム(zoom等)を用いた授業方法が推奨された¹⁾。

新型コロナウイルス感染症が流行している現在、他大学のオンライン授業の実践(研究)として、いくつか研究報告が発表されている²⁾。だが、新型コロナウイルス感染症が流行している8月現在、教職課程科目のオンライン授業実践の報告は管見の限りでは確認できない。その点で本稿は、オンライン授業を通じた教員養成の可能性と課題に近づくものとして位置づく。本稿の構成は以下の通りである。

第1に、オンライン授業化について考察していくにあたり、教職課程科目としての「教育学原論」の位置づけについて、教職課程コアカリキュラム、筆者担当分のシラバスの内容の確認を行う(2節)。第2に、筆者が実践したオンライン授業について、データを基にした実践の様相を記述し、いかにして学生との意見交流を通じた授業づくり、改善を行ったか

を述べる(3節)。第3に、これまで記述してきた教育学原論のオンライン授業化の意義と課題について提示する(4節)。

2. 教職課程科目「教育学原論」の位置づけ

2-1 教育の基礎的理解に関する科目:教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

当科目の実践について論じる前に、科目の位置づけを確認する。

2017年11月に教職課程コアカリキュラムに関する検討会より、『教職課程コアカリキュラム』が公開された。公開されたコアカリキュラムにおいて、当科目は教育の基礎的理解に関する科目「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に位置づけ、全体目標、(1)教育の基本的概念、(2)教育に関する歴史、(3)教育に関する思想といった項立てがされている。更に、各項において一般目標、到達目標が示されている。

表1 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想³

全体目標:教育の基本的概念は何か、また、教育の理念にはどのようなものがあり、教育の歴史や思想において、それらがどのように現れてきたかについて学ぶとともに、これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを理解する。

(1) 教育の基本的概念

一般目標:教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解する。

到達目標:1) 教育学の諸概念並びに教育の本質及び目標を理解している。

2) 子供・教員・家庭・学校など教育を成り立たせる要素とそれらの相互関係を理解している。

(2) 教育に関する歴史

一般目標:教育の歴史に関する基礎的知識を身に付け、それらと多様な教育の理念との関わりや過去から現代に至るまでの教育及び学校の変遷を理解する。

到達目標:1) 家族と社会による教育の歴史を理解している。

2) 近代教育制度の成立と展開を理解している。

3) 現代社会における教育課題を歴史的な視点から理解している。

(3) 教育に関する思想

一般目標:教育に関する様々な思想、それらと多様な教育の理念や実際の教育及び学校との関わりを理解している。

到達目標:1) 家庭や子供に関わる教育の思想を理解している。

2) 学校や学習に関わる教育の思想を理解している。

3) 代表的な教育家の思想を理解している。

2-2 「教育学原論」授業計画—教育の概念・歴史・思想に関する授業構成—

当科目ではどのような授業内容ですすめたのかについてみていく。

表2は、筆者担当分のシラバスから授業計画を抜き出したものである。授業計画を見てわかるように、授業において教育の概念、歴史、思想を中心に扱う必要がある。教育の概念や思想は抽象的で複雑な概念も多いため、対面授業においても学生に内容を伝達し、議論を促すことは難しい。そこで、当科目ではオンライン授業の利点を活かし、受講者の学び

の充実化を目指し、オンライン授業実践に取り組むこととした。

なお、春1学期は授業開始が遅れたため、第15回授業は実施することができなかった点を付言しておきたい。

表2 教育学原論授業計画(筆者担当分)

回数	授業内容
1回	オリエンテーション。本科目を学ぶ意義と目的について理解を図る。
2回	教育とは何か(1)。教育の意義・必要性・可能性(人間形成、発達、子ども)について理解を図る。
3回	教育とは何か(2)。発達段階と発達課題のかかりから教育観の変遷について理解を図る。
4回	教育の思想(1)。近代教育思想(啓蒙としての教育、子どもの発見、近代の産物としての子ども)の変遷について学習する。
5回	教育の思想(2)。近代教育思想、特に大人—子ども関係、子どもの権利に関わる思想の変遷について学習する。
6回	教育の思想(3)。子どもの自己発展を重視する教育観の変遷について理解を図る(ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなど)。
7回	教育の目的(1)。社会の動向と教育観・教育目的の関連について、教授と学習、「勉強」、経験、「学力」、評価などの諸概念の吟味を通して理解する。
8回	教育の目的(2)。古代から近現代にかけての西洋における教育の歴史の変遷について理解を図る。その際、学校と社会の関係、近代公教育と学校の成立に焦点をあてながら概説する。
9回	教育の目的(3)。古代から近現代にかけての西洋における教育の歴史の変遷について理解を図る。その際、学校と社会の関係、近代公教育と学校の成立に焦点をあてながら概説する。中間テストを実施する。
10回	教育の目的(4)。古代から近世にかけての日本における教育の歴史の変遷について理解を図る。
11回	教育の目的(5)。近現代の日本における教育の歴史の変遷について理解を図るとともに、現在の学校文化の醸成の背景をおさえる。
12回	社会教育と生涯学習、青年期の教育、大人の学びとその支援、ならびに生涯にわたる学びの支援の意義と理念、評価のあり方について理解を図る。
13回	公教育の理念としくみ、公教育の歴史と思想をもとに、公教育機関を支える理念と管理運営の基本的枠組み、それらを取り巻く政治について理解を図る。
14回	教師とはどういう存在なのかについて、技術的熟達者、養成、省察、専門職化、教育公務員の職責、教育職に求められてきた責任と役割について、歴史的観点、社会的観点から理解を図る。
15回	教育へのアクセスの仕組み、意義と課題について理解する(学校制度、高等教育、インクルーブ教育等)。

3. オンライン授業実践の実際—実践方法・省察—

3-1 授業実践の方法 (1) VOD 形式

学内の教室において対面授業を実施する想定をして、前節で示したシラバス等を作成・公開していた。だが、急遽オンライン授業化する必要が生じた。そこで、当科目ではVOD(ビデオオンデマンド)形式を主体とした授業方法を採用した。その理由は3点ある。

第1に、視聴時間帯を自由に選択できる点である。1年次生はまだ大学の授業やオンライン化に対応するには時間を要するため、ライブ配信の場合、授業時間中に課題作成、ノート作成などに困難が生じる可能性がある。

第2に、第1の理由とも重なるが、繰り返しの視聴を可能にすることで学生の授業理解を促すことである。当科目は1年次生を主な対象とした科目であり、とりわけ春1学期のため、大学の授業(講義)形式に1年次生がスムーズに適応できない恐れがある。加えて、再履修者等の2年次以降の学生も学習内容の定着、オンライン授業への適応に不安が残るため、VOD方式を採用した。学生が教員による授業映像を視聴し、配付資料等を同時に使用しながら受講するかたちとなる。

なお、毎回の配付資料、課題(コメントカード等)授業映像、資料映像は正規の授業開始時刻までにMylogにYouTube経由でアップロードした(図1)。

当科目では動画投稿サイトのYouTubeを活用した。選定の理由は、学生が日常的に利用している可能性が極めて高く、視聴のみであればアカウント取得も不要で、視聴操作も容易なため、学習への適応がスムーズになることが予想されるからである。

また、本学のMylogは、YouTubeにアップロードした動画をMylog上で視聴できる機能がある。動画のリンクをコンテンツに貼り付けることで、学生はMylog上で動画視聴が可能になると同時に、担当教員は各学生の視聴進度が確認できる(図2)。



図1 Mylogにおける「教育学原論」コース管理画面の一例



図2 コース管理における「コンテンツ」の表示画面の一例（画像は他科目の教育行政学）

授業映像の内容は、担当教員が作成したパワーポイントを映し、教員が対面授業と変わらないかたちで口頭説明を行っている。授業映像の大まかな構成は、①前回授業の感想・質問への回答・連絡、②本時の導入、③内容説明、④個人ワーク・指定教科書を読む、⑤コメントカード記入である。また、授業映像で重要な点として挙げられるのが、視聴時間である。当科目では40分程度から最長で70分程度のものまであり、各回の構成によって視聴時間を変更している。



図3 授業映像の一部

3-2 授業実践の方法(2) 配付資料の使用

先述したように、担当教員が作成、授業を行っているVODの視聴が受講方法のメインとなる。だが、単に授業映像を視聴させるにとどめず、当科目では各回で「学生用スライド」と称して、教員が作成したスライドを学生が学習するために内容を一部編集したものをMylogで配付している。教員用と学生用の違いを端的に述べれば、教員用のスライドには用語や文章が赤字で記されており、学生用スライドは赤字の部分が空欄になっている。この空欄を学生は授業映像に映し出されている教員用のスライドから書き写す。これは、動画視聴の集中力を持続するための配慮であるとともに、重要語句の習得、教員採用試験で頻出部分を空欄にしている。僅かではあるが、こうした工夫を施すことによりオンライン授業で失われる可能性のある集中力と学習意欲の継続を試みている。

3-3 データの詳細

本稿では、4点のデータを基に省察を行う。第1に、毎回の授業で配付・回収する「コメントカード」である。コメントカードの機能は、1つ目は講義終了時に受講者に、講義を通して考えたことについて論じるものである。なお、学生に過度の負担を与えないために、「最低で3行以上(150字程度)」を執筆するように指定した。2つ目は、授業改善につながる質問・要望を受け付けるものである。例えば、配付資料の字の大きさ、配付資料の数、資料映像の視聴時間の長さや音量、講義内容に関する質問、講義内容の難易度、講義の進度について担当教員に回答・改善を求める事項があれば、その旨記載するように求めた。コメントカードで受けた質問・要望は、次の回の冒頭に「第〇回講義の質問・感想の回答」としてA4サイズの資料を2ページから6ページ程度作成して回答し、口頭で説明を行っている。また、前回の講義内容に関する質問があった場合、質問に回答・解説を加えながら、本時の講義の導入としても活用している。さらに、オンライン授業は受講者同士の顔が見えなければ議論することも容易ではない。そこで、受講者がコメントカードに書いた質問・回答・議論を一覧にして共有することにより、分断されている受講者間の意識のシェアが可能になるという利点がある。コメントカードを活用することで、オンライン授業のデメリットである受講者間の意識の分断の緩和が期待できるのである。

3つ目は、課題設定型ミニレポートとしての機能である。特定のテーマを設定して、そのテーマについて自分の考えを論述していくことにも使用している。そして、提出はMylog

を通じて2日以内に提出することとした。

／ 確 限 第 回 目	学籍番号： 学部・学科：
氏名：	
レポートタイトル：	

※取まりきらない時は裏面へ

図4 教育学原論コメントカード⁴

そして、第2～4のデータはMylogを利用して受講者に行ったアンケート調査である、①「受講環境の調査（ネット環境など）」、②「第1回授業を受けて」、③「教育学原論受講後アンケート」である。各アンケート調査の実施概要は下記に示すとおりである。アンケート調査はMylogのアンケート機能を利用して、受講者にメールでアンケート記入を呼びかけた。その際、「①」「②」は授業開始当初に実施したため、受講者の状況把握、意見収集が必要であり、「重要」アンケートとしてMylog上でタグ付けしている。

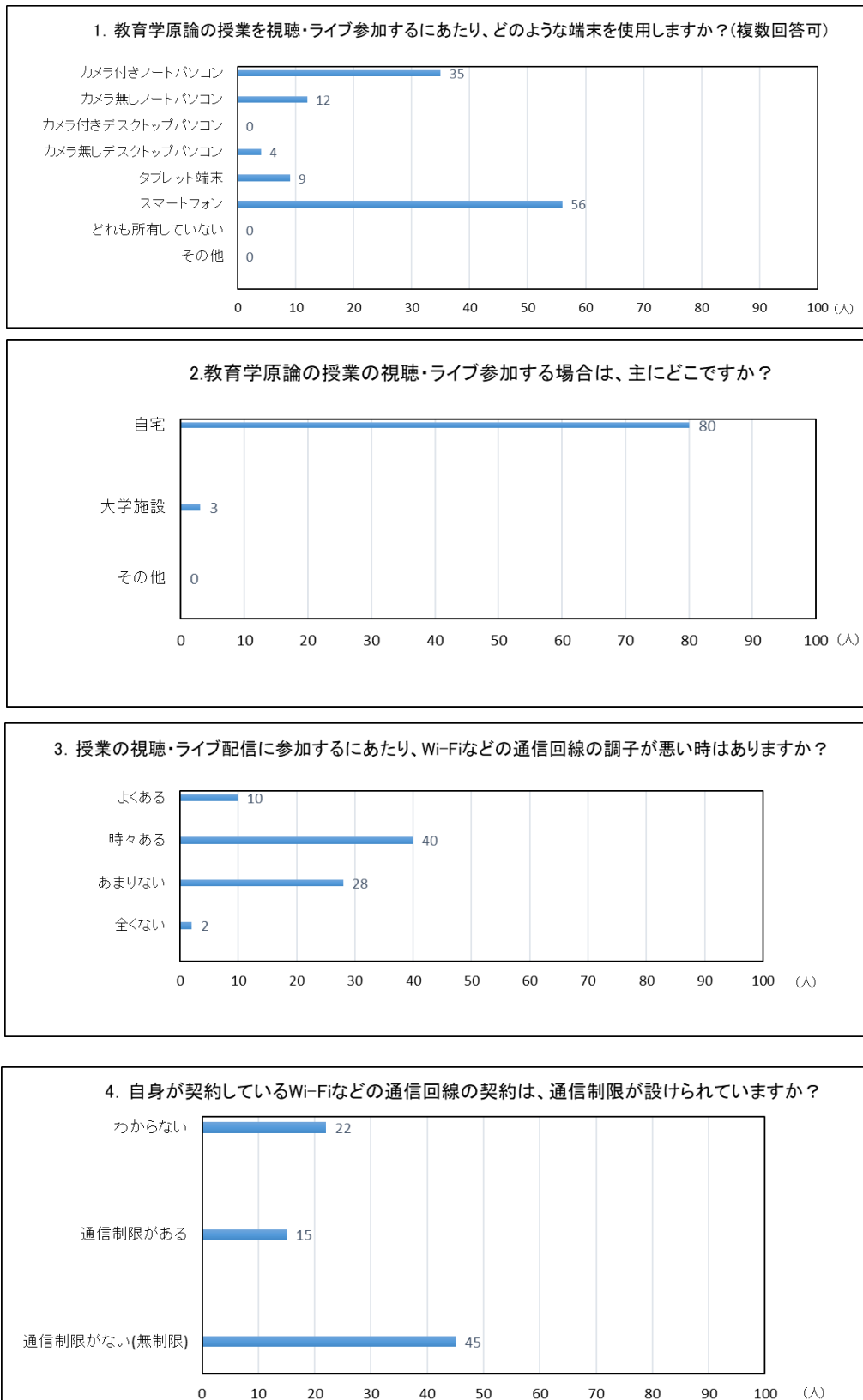
表3 アンケート調査実施概要⁵

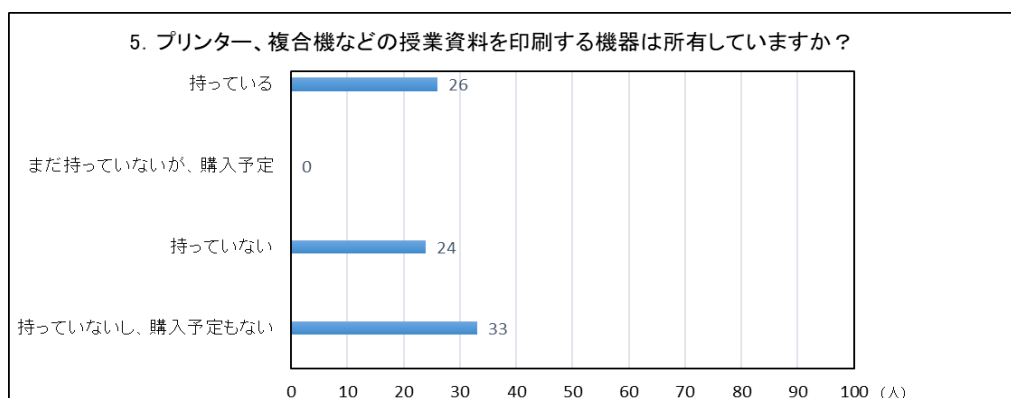
<p>①受講環境の調査(ネット環境など) 調査時期:2020年4月18日(土)00:00～2020年4月23日(木)00:00 調査方法:Mylog「アンケート作成」を通してオンラインで実施 対象者:86名回答者数:80名 回答率:93.0%</p> <p>②第1回授業を受けて 調査時期:2020年4月21日(火)00:00～2020年4月23日(木)00:00 調査方法:Mylog「アンケート作成」を通してオンラインで実施 対象者:92名回答者数:76名 回答率:82.6%</p> <p>③教育学原論受講後アンケート 調査時期:2020年7月1日(水)13:25～2020年7月5日(日)23:59 調査方法:Mylog「アンケート作成」を通してオンラインで実施 対象者:94名回答者数:45名 回答率:47.9%</p>

3-4 学生のオンライン授業開始時の受講環境

表4に示しているデータは「受講環境の調査」である。この調査は当科目の正式開講の2日前からMylog上で掲示を行いながら呼びかけるとともに、受講者に対して送ることが可能なメール配信機能を用いて行った。なお、受講者全員回答を求めたため、高い回収率となっている。では、以下に提示したデータを幾つか見ていくこととする。

表4 「受講環境の調査」結果 (設問1.~5.)





まず、「1. 教育学原論の授業を視聴・ライブ参加するにあたり、どのような端末を使用しますか？」について、スマートフォンを選択した者が 56 名、カメラ付きノートパソコンを選択した者が 35 名、カメラ無しノートパソコンを選択した者が 12 名と応えている点に着目したい。この設問は複数回答可であるため様々な端末を用いていることが考えられるが、スマートフォンを選択している者が多いことがわかる。

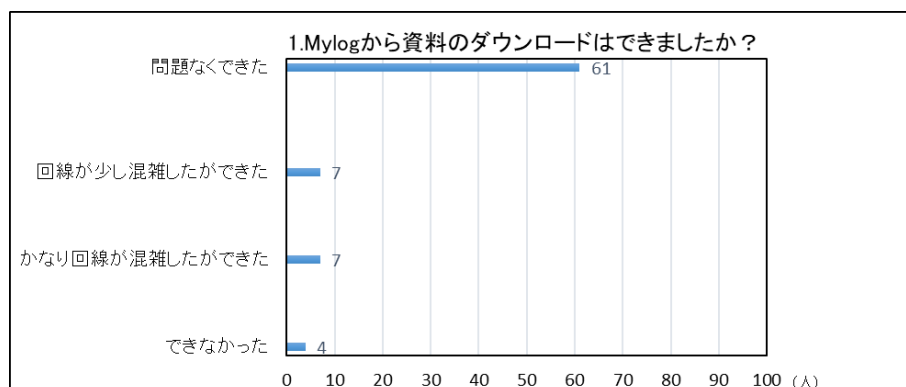
「2. 教育学原論の授業の視聴・ライブ参加をする場合は、主にどこですか？」については、「自宅」と回答した者がほとんどであるため接続環境の整備や端末の保有は一定程度されていることが推測できる。2 と関連する設問として「3. 授業の視聴・ライブ配信に参加するにあたり、Wi-Fi などの通信回線の調子が悪い時はありますか？」については、「あまりない」が 28 名、「全くない」が 2 名であることから、多くの学生が通信回線に何らかの課題が生じていたようである。

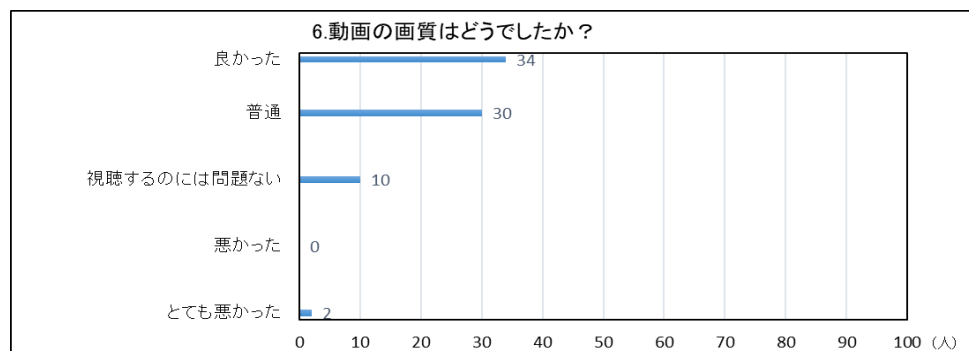
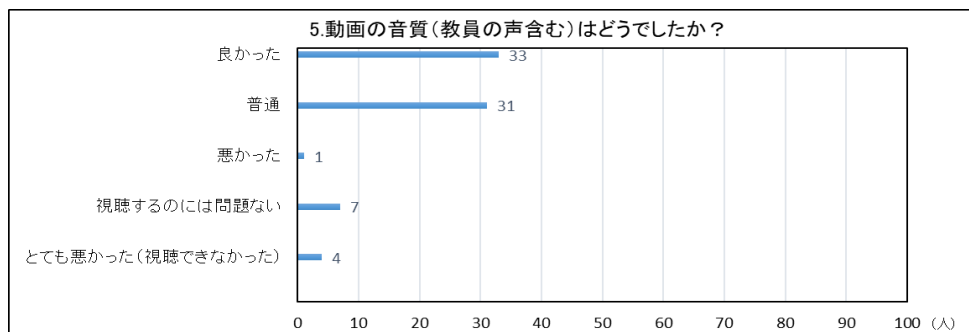
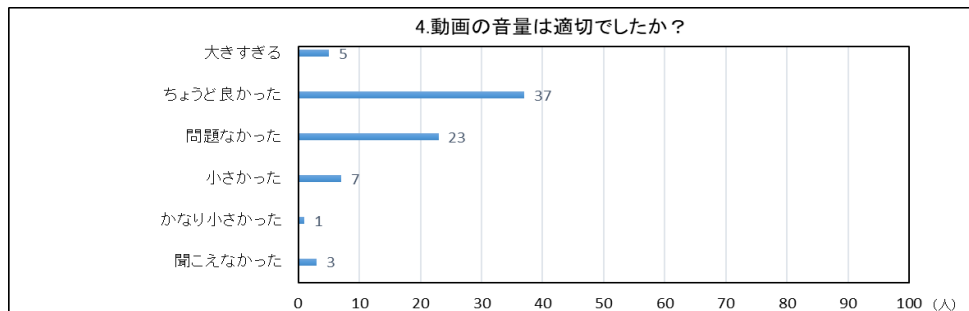
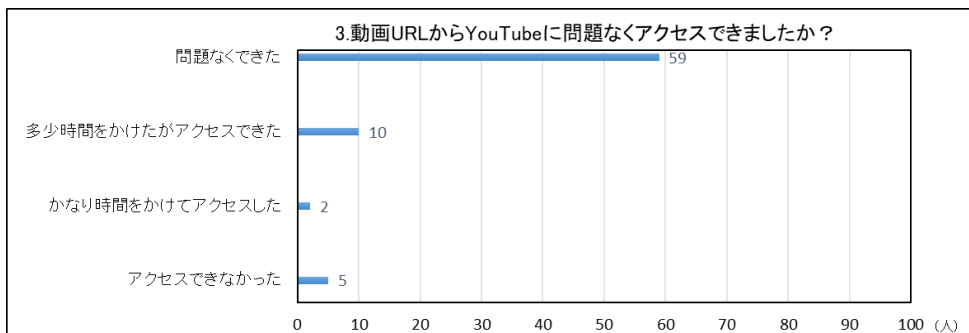
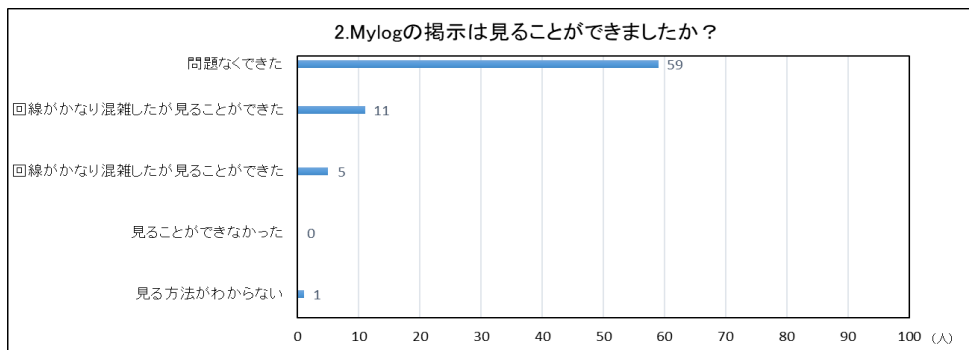
そして、学生への資料提示において考慮すべき点として、「5. プリンター、複合機などの授業資料を印刷する機器は所有していますか？」において、開講時点で、印刷機器を所有していたのは 26 名であった。このことから、資料の印刷を前提とした資料準備は控える必要があると判断し、2 回目以降の授業の準備をすすめた。

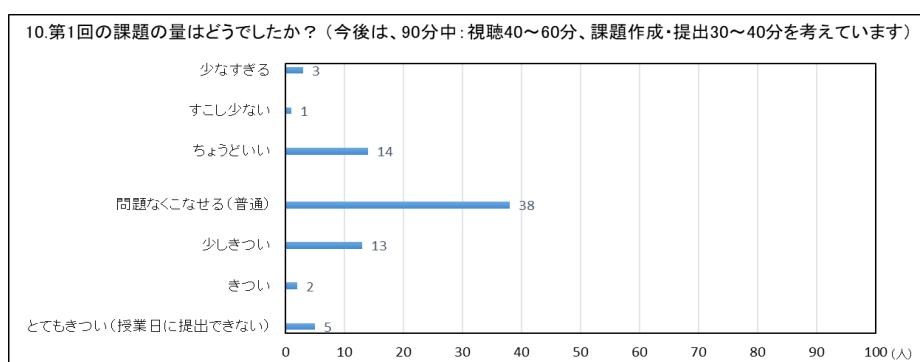
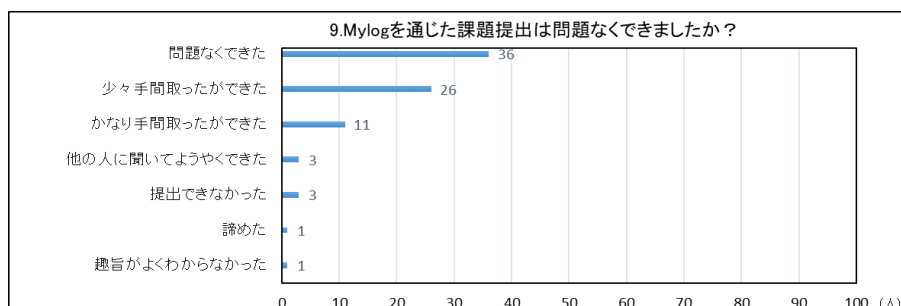
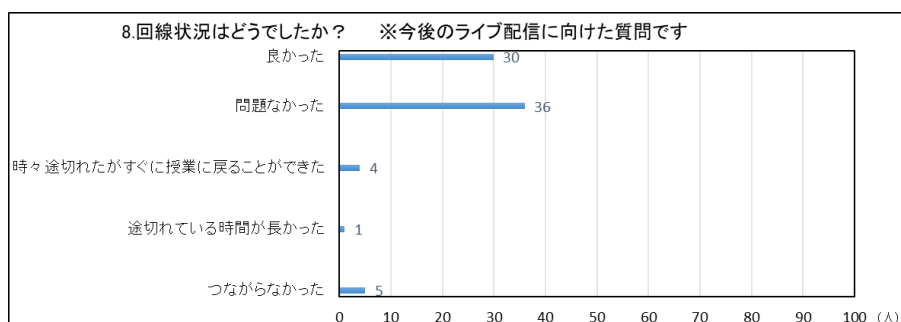
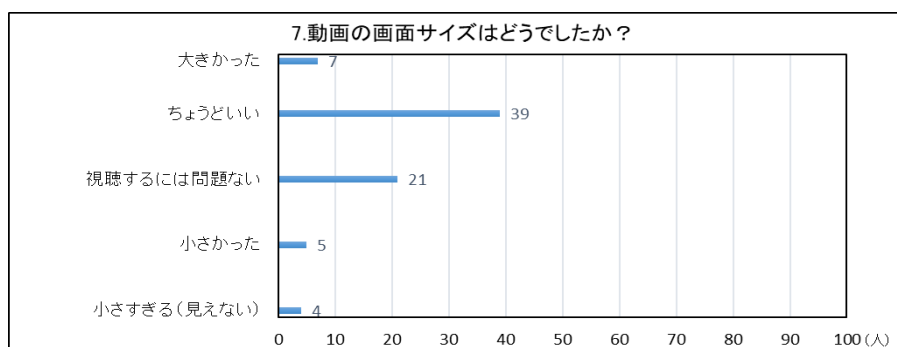
3-5 初回授業後の学生の反応と改善

では、初回授業後の学生はどのような反応を示したのだろうか。データを表 5 に示す。

表 5 「第 1 回授業を受けて」結果(設問 1.~10.)⁶







「第1回授業を受けて」は、学生が受講時に何らかのトラブルが発生していないか、また、学習の妨げになるような要因があったのかについて調査することに主眼を置いた。当科目は春1学期段階の初回授業であるため、Mylogの基本操作に躓きが一定程度見受けられた。だが、第1回授業後の調査結果からは大きなトラブルが発生することなく進んだことが推察できる。

オンライン授業で不安視される点として「集中力」が挙げられる。本稿で表は掲載しないが学生の緊張感を除き、本音を書いてもらえるように、「11.ざっくりとした質問ですが、集

中にはある程度続きましたか？」という設問を追加設定した。これに関しては64名が「はい」、12名が「いいえ」と答えており、学生の集中力が一定程度持続したことが推測される。

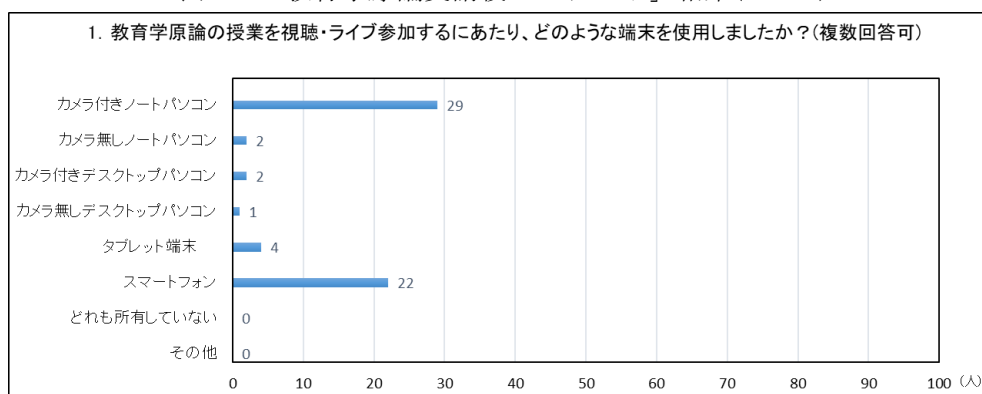
なお、解答自由の自由記述解答として、「12.教育学原論とは関係ないですが、他の授業の視聴・課題作成と両立できそうですか？(自由記述)」、「13.自由記述欄です。選択肢で答えられないことがあれば、書いてください。(他の授業で良い取り組み、面白い方法などが行われていましたら、情報をもらえると助かります)」も盛り込むなどして、選択肢形式の設問に拘らない回答を促した。また、他の授業において有益な実践が行われていれば、その情報も入手・実践することで、授業改善はもちろんだが、学生が科目によって受講方法を変えることから生じる負担感の軽減を意識した。自由記述式の設問には特段の改善要望などの情報は記載されていなかったが、コメントカードにはいくつかの改善要望があった。多かったのが、「動画の音声小さい」である。それまで自前のヘッドセットを着用し、音声入力の音量は最大にして収録していた。音量の問題がクリアできても、音質に関する要望もあったため、ストリーミング配信等で良く用いられる集音声に優れたデジタルマイクを導入したところ、多数の学生から好評を得た。これにとどまらず、受講者に対しても視聴方法について、スピーカーもしくはイヤホン装着のうえ視聴、デバイスの音量調整を要請している。

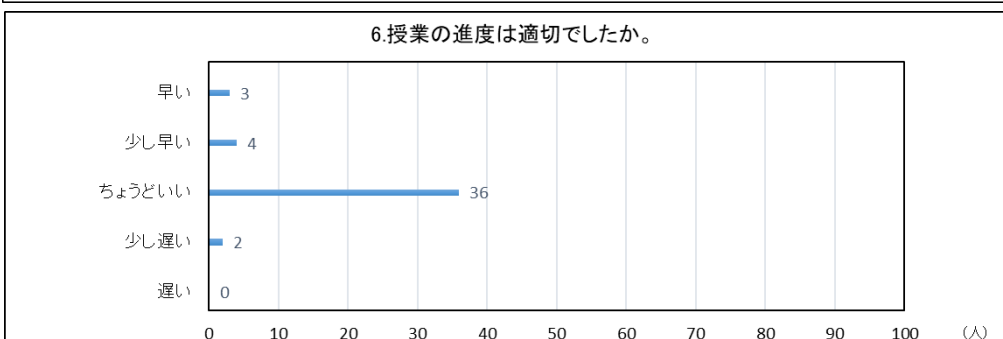
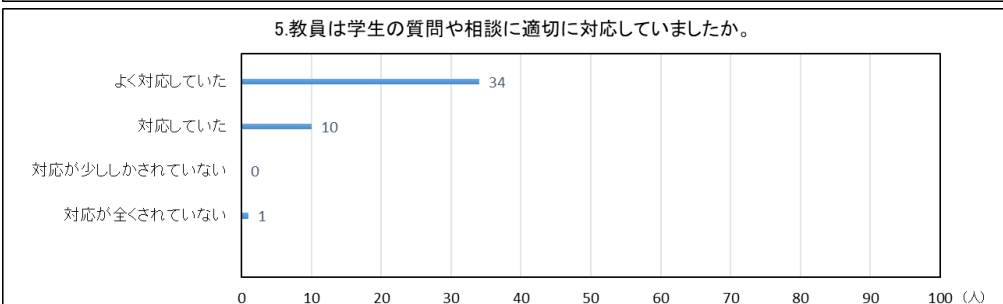
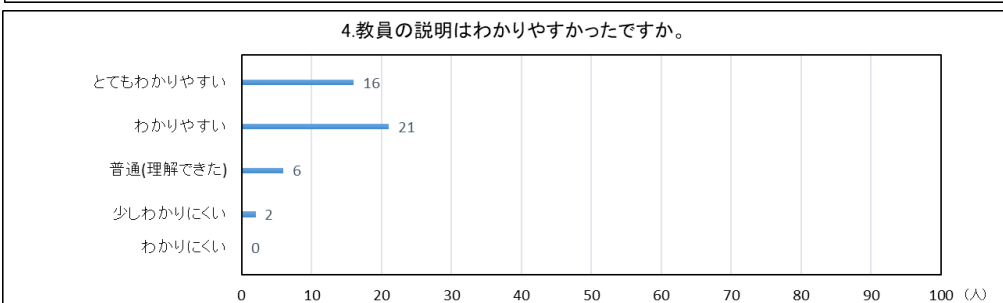
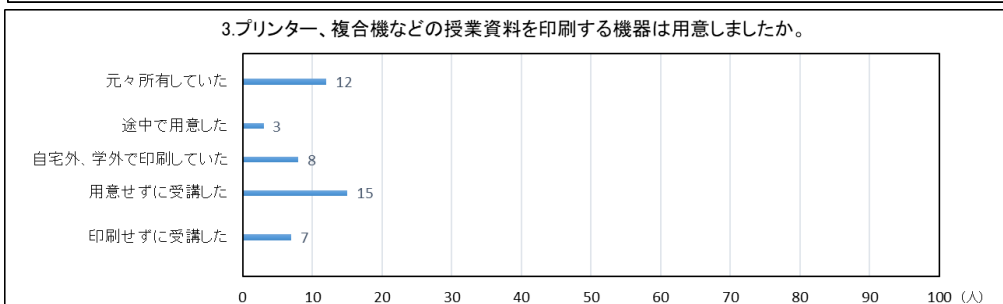
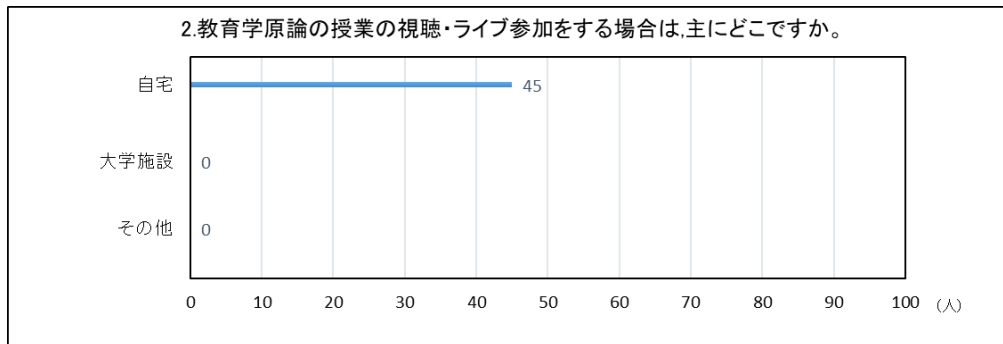
そして、授業映像の音声の次に多かったのが、「画面小さい」である。「受講環境調査」で「1. 教育学原論の授業を視聴・ライブ参加するにあたり、どのような端末を使用しますか？」において、スマートフォンが大勢を占めていたため、スマートフォンの画面で視聴する受講者を意識した画面のサイズ、加えて、「1枚のスライドの情報量」を減らしてほしいという要望もあったため、即座に改善を試みた。その結果、同様の指摘は減少した。

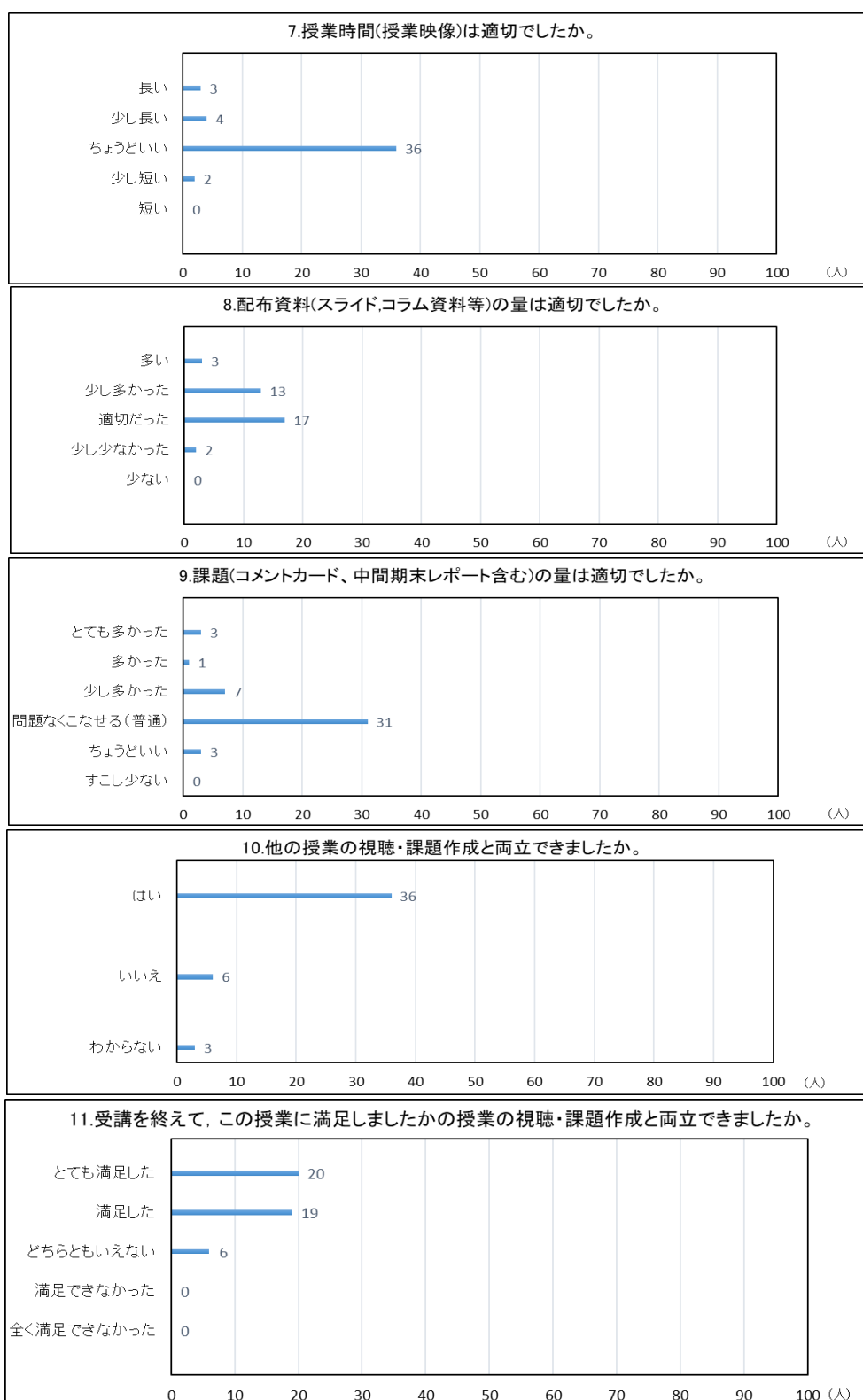
3-6 学期終了後の学生の反応と振り返り

全14回終了後に実施したアンケート調査の結果を下記に挙示しておきたい。

表6 「教育学原論受講後アンケート」結果(1~11.)







データを見ていくにあたり留意しなければならないのは、授業期間が終了してから日数
 が経っているため回答率は 47%であり、協力者数が少ない点である。

「1.教育学原論の授業を視聴・ライブ参加するにあたり、どのような端末を使用しました

か？(複数回答可)」は、「受講環境調査」の1番の設問と類似の内容である。回答率の低下には留意しなければならないが、本調査の結果を見ると使用する端末に大きな変化は見られない。「3.プリンター、複合機などの授業資料を印刷する機器は用意しましたか」について、「途中で用意した」と回答する学生は本調査では3名だった。当科目に限らず、他の科目においても印刷の必要性を減らしている可能性が考えられる。「4.教員の説明はわかりやすかったですか。」に対して、肯定的な回答が多数を占めていた。だが、本調査に回答していない学生の数が多いため、授業に対して不満を抱えている学生が回答をしていないことが考えられる。加えて、成績評価に影響がないということを説明し、成績提出も終わっているタイミングではあるものの教員本人が調査を実施・回収しているため、学生側が今後に影響が出ないように配慮したことも留意しておく必要があるだろう。

そして、注目すべきは「6.授業の進度は適切でしたか。」である。回答した多くの学生は「ちょうどいい」としている。一見すると問題ないように見られるが、「早い」「少し早い」にも一定程度の回答がされているため、今後の授業進捗にも十分に注意を払う必要がある。「7.授業時間(授業映像)は適切でしたか。」についても、「ちょうどいい」が圧倒的多数だが、「長い」「少し長い」に一定程度の回答数が集まっているため、今後、VOD授業を行っている場合は、映像時間に注意していく必要がある。

3-7 コメントカードやワークを通じた学生との意見交流

さて、前項までアンケート調査の結果を確認してきた。だが、量的調査で傾向をある程度確認できても、学生の具体的な考えまで把握することには限界がある。そこで、まずはコメントカードを使用した学生との意見交流による筆者の省察のプロセスを記述していく。

3-3でも述べたように、コメントカードを通して受講者間の意識共有、議論促進を試みた。

まず、成果について述べていく。例えば、第1回授業終了後に回収したコメントカードには、学生から次のような反応があった。

他の人の意見を見ることができてとてもおもしろかった。自分の意見、考えと似ている人もいれば全く思いつかなかったものもあり、興味深いなと思ったのと同時にこんなにも多様な考え方ができる人間って面白い生き物だなとも改めて思った。

(1年・A氏)

オンライン授業ではあるが、第1回授業後にこれまでの授業では経験したことがないような意見共有ができていくことがうかがえる。

当科目は教職課程科目のため、学校教育現場で働いていく教師を養成していくことが役割である。だが、学校における規範、教育の概念など自明とされているものを捉え直すことが教育学原論では求められる。そこで、「自己紹介シート」の追加質問として、「教育が存在しない世界とは、どういう世界でしょうか?」、「教育機関、教育の場がないとどうなるのでしょうか?」を設定し、受講者全員に回答を求めた。その結果、様々な回答がされていたため、第2回授業時に整理したものを学生にMylogを通じて配付し、授業の冒頭で紹介した。そうすると、「教育が存在しない世界」について、「動物の世界」のように争いが絶えない、秩序が存在しないというコメントを紹介したところ、以下のような反応があった。

教育が存在しない世界とは？という問いに対する皆の回答が興味深いものばかりでした。自分も「動物の世界」という回答になるほどと思いました。

(1年・B氏)

教育が存在しない世界や教育の場がない世界質問のみんなの意見で動物の世界っていう意見には私もすごく興味が湧きました。またこのような質問を受けて共有してみたいです。

(1年・C氏)

上記では、コメントカードを通した受講者間の交流の一端を示した。この他にも、第3回では、親と子どもの関係、家庭環境を考えることにつながる「遺伝と環境」について取り上げた。その際、学生のコメントを整理し、第4回授業時に一覧にしたものをMylogから配付したところ、自身の置かれていた家庭環境が自らの成長・発達、進路選択に影響を与えていたことなどを改めて実感する学生が多く見受けられた。以下のコメントは一例である。

やはり、勉強していく中で、他の人の意見を聞くことにより、自分の視野が広がり、また変わった視点から見ることができ面白かったです。今の家族、保護者に育てられていなければ、色んなことに挑戦することなく(中略)、これまでの出来事がなかったら、今頃、大学にはいかずに働いていたと思います。

(1年・D氏)

上記に示している以外にも、ミニレポートを含めて、多くの議論がコメントカードの記述を通してされていたが、紙幅の関係もあるため一部を紹介するとどめている。

そして、当科目はコメントカードを通した実践だけではなく、オンライン授業における集中の持続を高めるとともに、オンライン上でも回覧しやすく、リフレッシュを兼ねた個人ワークも設定している。その一例がマインドマップである⁸⁾。

第2回授業において、「教育」をテーマとして、コメントカードの裏に、「教育」と書いて、教育から思い浮かぶものを書き、自らが捉えている教育を可視化するとともに、他の受講者との交流を通して、個々人が考える教育の概念の把握、教育を成り立たせる諸要因の探究、その後の教育思想を学習する際に、人々が思い描く思想を捉えるための「掘り起こし」を企図した。

具体的な方法は、受講者が各自で白紙の用紙やノートに手書きでマインドマップを作成し、コメントカード等の課題とともにMylogに撮影した画像データを提出してもらい、担当教員がPowerPointにまとめて、第3回授業映像の冒頭で導入を兼ねて紹介した。マインドマップの回覧を通して、「楽しめた」という反応が多くある一方で、マインドマップを通じた考察、他の受講者のマインドマップをみることによって、自身が持つ教育の概念の捉え直しが進んでいるようである。

他の人のコメントを見て、自分との違いを見て考え方が違って面白いと思った。教育についての価値観がそれぞれ異なっていて話し合いが楽しみになった。

(1年・E氏)

マインドマップを書いて教育について自分なりに整理して考えたことは、教育には大人と子供、教師と生徒、教える立場の人間と教わる立場の人間が存在しておりその二つが中心となっているのではないかと思いました。そして、その二つを動かすように周りの環境があり形成されていくのかなと思いました。また、教育について考えていくと無意識のうちに考えると、ほとんどが学校に関係するものでした。このことから、今の自分を構成している教育というなかでは学校という存在はとても大きなものだと思います。

(1年・F氏) (下線部は筆者)

マインドマップの課題が出されましたが、いざ書いてみると教育は幅広い分野に結び付くのだということを改めて感じました。

(2年・G氏) (下線部は筆者)

今後は、この授業や他の教育の授業を通して、教育から何がつながるかを真剣に考えていきたいと思いました。

(2年・H氏)

1年・D氏のコメントからは、オンライン媒体を通じた受講者間の交流だったが、今後の対面授業への意欲が良いかたちで向上していることがわかる。また、1年・F氏からは、マインドマップ作成を通して自身の考えを可視化することにより、教育を構成する理念、教育や学校の関わりについて捉え直すきっかけになっていることがわかる。2年・G氏、H氏においても教育が様々なこととつながりを持っている点について意識している。このように、オンライン上ではあるが、マインドマップなどのワークを行うことにより、受講者間の交流促進に結実した。

4. まとめにかえて

新型コロナウイルス感染症拡大の最中、「学びを止めない」ために多くの教育機関が様々な取り組みを行っている。当科目における取り組みは、1人の教員による実践であり、担当教員の力量不足により、受講者のニーズや要望に十分に答えられているか、改善できているかについては慎重に判断しなければならないものの、当科目において確認できた一定の成果として、提示できる知見は以下の2点である。

第1に、コメントカードを利用した受講者間の交流である。大学における多くの科目で、コメントカードの取り組みが広がっているが、全ての科目で実践されているわけではない。オンライン授業だからこそ、コメントカードは、学生とのコミュニケーションツールとしてこれまで以上の価値を持つことが指摘できる。そして、回答の提示の仕方次第では、受講者間の議論促進も可能になる。教室で作成する「手書き」のコメントカードではなく、テキストデータとして回収することができるからこそ編集も容易になり、実践における障壁が減る。しかし、その一方で、担当教員の編集時間が増加する点には注意しなければならないだろう。

第2に、第1とも重なるが、課題の共有が容易になる点である。本稿で取り上げたマインドマップもその一例で、学生から Mylog を通じて送られた画像データや Word で作成されたデータをプライバシー処理すれば使用することができる点である。翻って、学生の視点からみれば、教室で他者の目を気にせずに課題の作成と発表が可能になる点は理解しておきたい。

最後に当科目における実践課題を述べる。当科目では、ウェブ会議システムを活用したグループワークを行わなかった。学内では実践している科目もあったが、当科目では、学生の通信回線の安定性や通信制限の問題、複数の配付資料、授業映像、資料映像などを利用するため、スマートフォンを使用する受講者のことも勘案し、繰り返し再生可能で安定して視聴できる VOD 授業、担当教員のリードによるコメントカードの整理・提示を行った。今後は、対面授業とオンライン授業の併用方式の探究、ウェブ会議システムを用いたオンライン授業づくりを探究していきながら、教員—学生間はもちろんだが、受講者間の交流を促していくことで、オンライン授業の質の向上に努めていきたい。

註・参考文献

- 1) 緊急事態宣言の発出に対する本学の対応～オンライン授業実施に向けて～
<https://www.ous.ac.jp/topics/detail.php?id=1966&page=11>(確認日:2020年8月22日)。なお、本学では2020年度時点ではクォーター制を導入している。
- 2) 例えば、下記の論稿が挙げられる。
 山本敏幸, 岩崎千品, 柴田一: 関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題 (特集 対面授業からオンライン授業切り替えの取組み), 大学教育と情報, 2020年度(1), 2-10.
 二瓶裕之, 門貴司, 西牧可織: 北海道医療大学のライブ配信による遠隔授業の取組みと課題 (特集 対面授業からオンライン授業切り替えの取組み), 大学教育と情報 2020年度(1), 11-16.
 森田裕介・向後千春: 早稲田大学のオンライン授業の取組みと課題 (特集 対面授業からオンライン授業切り替えの取組み), 大学教育と情報 2020年度(1), 17-22.
 また、オンライン授業の定義については、下記のような論稿がある。
 古川雅子: Interview オンライン授業の歴史と現状—新たな学びのかたちを拓く—ITを活用した新型コロナウイルス対策教育や研究活動を止めないために,(2020年8月19日).
<https://www.nii.ac.jp/today/88/6.html#:~:text=%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3%E6%95%99%E8%82%B2%E3%81%AE%E5%85%83%E7%A5%96%E3%81%AF,%E3%81%8C%E5%8F%96%E3%82%8A%E5%85%A5%E3%82%8C%E3%82%89%E3%82%8C%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82&text=%E3%82%B9%E3%82%AD%E3%83%8A%E3%83%BC%E6%95%99%E6%8E%88%E3%81%8C%E3%80%81%E8%87%AA%E8%BA%AB%E3%81%AE,%E3%83%9E%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%80%8D%E3%82%92%E9%96%8B%E7%99%BA%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82>
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf(取得日:2020年8月22日)。
- 3) 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会『教職課程コアカリキュラム』(2017年)より。
- 4) 図4で提示しているコメントカードは、第1回目から学生との意見交流を経て修正したものであり、第4回目から使用している。
- 5) 調査対象者の人数は、履修取り消し、追加登録などにより多少増減している。

- 6) Mylog を用いたアンケート調査では、受講者からの修正要望は少なかった。だが、コメントカードを通じて幾つかの要望はあったため、修正に応じた。
- 7) コメントカードに書かれていた内容を取り上げる際には、文意を損ねない程度に加筆修正を施している。なお、個人の特定を回避するための処理も施した。
- 8) 勝野正章・庄井良信：問いからはじめる教育学,有斐閣ストゥディア(2015)から着想を得た。

付記：)当科目では、オンライン授業では不足していたコミュニケーションを埋めるべく、希望者に対して期末レポートを添削し、Mylog を通じてフィードバックするなどして、受講者の学習ニーズに可能な限り応えるようにした。これは、当科目が1年次生向けの科目でもあるため、4年間の学びの基礎となるように意識して実施していることを付言しておきたい。

謝辞：アンケート調査、授業改善にご協力いただいた2020年春1学期「教育学原論」受講者の皆様、Mylog の使用方法を解説していただいた教育開発センターの皆様に御礼申し上げます。

